

「いやすイエス」

マルコによる福音書 第二章一～一二節

南山教会 二〇二六年二月八日

村山盛芳

礼拝堂にお集まりくださった皆さま、おはようございます。シルバーホーム「まきば」、名古屋東教会をはじめとしてYouTubeで礼拝にご参加いただいている皆さま、おはようございます。今日もご一緒に、みことばに聴きましょう。

今日の聖書箇所は、私が好きな箇所です。その理由は、後ほどお話します。「中風の人」が「床」、つまり担架のようなものに乗せられてやつて来ます。「中風」という語、「バラリーシス」は、「バラリンピック」のもとになつた用語のひとつでもあります。身体の半身が麻痺して動かすことができない状態、その病人を四人の人が担いで、イエスのもとに連れて行こうというのです。しかし肝心のイエスがおられる家は、「大勢の人が集まつたので、戸口の辺りまですきまもないほどになつた。イエスが御言葉を語つておられ」というのです。こんな数行の情景描写の中に、「人間」というものが何であるのか、幾つもの事柄がモザイクのように散りばめられています。評判の人が近くに来られたという噂で、大勢の人々が押し掛け、詰め寄せ、大騒ぎになつたのです。沢山の人間が群れをして集まつているところには、何か良いことがあるのだろう、という心理が働きます。今も同じような思いで、人は人込み中に集まり、列を作ります。そこに中風の人を連れた四人がやつて来ます。しかし「群衆に阻まれて、イエスのもとに連れてゆくことができなかつた」のです。「丈夫

な人に医者はいらない」とイエスは言われましたが、最も治療やいやしが必要な人が、阻まれて、医療の恩恵から閉め出される、という今日起つてある現実が、二重写しになつてゐるようです。

この四人の素性はまったく記されていません。「信仰ある家族、あるいは友人だろう」と想像する学者もいます。素性はどうあれ、何かの絆か、たまたまか、何ほどの縁があるて、運ぶことになつたのでしよう。人生の中でこういう事態が生じる事は、結構あるのではないでしようか。なぜか「巻き込まれる」という状況で、まあ付き合いだからと軽い気持ちで引き受けて、それが大ごとに繋がるのである。肝心の目的場所には、戸口まで人が大勢ひしめいていて、とてもではありませんが割り込めそうにないのです。

さあ、皆さんならどうされますか。一・あきらめる、二・しばらく待つ、三・強行突破する、四・抜け道を捜す、五・火事だと大騒ぎして、人々があわてて出てきた隙に潜り込む、等々、いろいろな手段と方法を取り得る可能性はあります。問題は、そういう想像力を持ち合わせておられるか、ということです。それは個人の能力や資質の問題ではないでしようか。行くべき道が塞がれて、前には障害物のように、人の波で塞がつてある。この時、それでもどこかに道はないかどうか、一步進ませる原動力になるものは、何なのでしようか。

「生命は必ず抜け道を探し出す」という言葉があります。これまで地球は何度も大絶滅の危機に遭遇しながら、それでも生命が形を変えて、次の世代に受け継がれてきました。その背景には、生命自身がいろいろなやり方で抜け道、逃れる道を見いだして来たからだというのです。抜け道、逃れる道を見いだそうとすることは、生命の自然な摂理なのでしよう。この四人が、人波によつて塞がれている正面玄関への道ではなく、屋根に上り、天井を剥ぐとい

ういわば「上からの道」を見出した。そこにはやはり、生命のダイナミックな跳躍があり、そして何より、病気で苦しむひとりの生命に、何とか共にあろうとする寄り添う思いが、「抜け道」を見出させる力なのでしよう。

だからこの四人の思いとを行いを、「乱暴」とか「無礼」、また「非常識」とか評する人は、「生命」というものの何たるか、ほんとうの姿、有様を知らない人でしょう。「イエスのもとに連れて行くことができなかつたので、イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした」、こんなことは、人の評判、自分の損得だけ考えて行動するような人には、到底まねのできないことです。彼らが開けた天井の穴は、私たちの臆病に縮こまり閉ざされた心、魂に、風穴を穿つほどものではなかつたでしようか。だから生命の主は言われます。「イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人々に、「子よ、あなたの罪は赦される」と。私が好きなのは、「その人の信仰を見て」ではなく、「その人たちの信仰を見て」と聖書が語つてのことです。中風の人々に信仰があつたか、無かつたか、をイエスは問題にしておられません。イエスは、この四人の振る舞いを「その人たちの信仰」として受け止められたのです。マルコにとつて、「信仰」とは、まさにこういう事柄なのです。教理がどうの、信仰告白がどうの、規則がどうの、よりももつと前があるのです。自分たちに何ができるわけではない、とにかくつらい思いをしている人の命と共にあつて、その人と共に、イエスのもとにやつて来て、共に祈り願うしかないではないでしようか。天井に穴を開けて釣り下ろすような、無謀なやり方でも、イエスのもとに行けば、何とかなる、と。

さらにイエスは、担がれて来たこの中風の人々に、「あなたの罪は赦された」という言葉を

語られています。そうだろうと思います。どういう関係、素性かは分からないけれども、四人で力を合わせてここまで運び、屋上に上つて天井を剥いで自分の前に下ろす、こんな振る舞いは、「愛」がなければ、できないことでしょう。こんな人間と人間の繋がりの中に、病人は置かれているのです。この生命の暖かさの中に、「罪」は力を失うのです。「愛はすべての咎を覆う」のです。

マルコは、イエスの宣教にまつわるサプライズの出来事を通して、人間のあり様、あり方、さらにそこから教会の働きとは何であるかを、たとえ話のようにここに描き出しているのでしよう。苦しむひとりの寝ている人の床を抱えて、屋根に上り、天井を剥いで病人を釣り下ろす、無茶で無様で、決してスマートではない。自分たちには病を癒す力はないが、あの方のところなら、何とかなるのではないか、そのように大したことは出来ないが、それでまあこれやってみる、それこそ生きた生命の働きであろうし、信仰のまことではないでしょうか。